

## 近松雜攷

藤井乙男

近松門左衛門といふ名稱は唐津の近松寺の僧であつたからとか、いや大津の近松寺に因縁があらうとか、さまざまの臆説はあるが、更に確證はない。近松は最初狂言作者であり、若い時は都萬太夫座の拍子木を打つたり、道具直しにも出たと評判記の類にも散見するから、一時下廻りの役者であつたらう。その證據は萬太夫座の俳優に近松勘之助、同京之助、同梅之助など門左と同様近松姓を名のるは、延寶頃に近松某といふ相當な俳優があつて、その系統から出たのであらうといふ一説は、稍傾聽すべきであるが、勘之助以前に近松姓の俳優が評判記の類に少しも影の見えないのが此説の弱點であらう。

野良關相撲(元祿六年三月刊)上卷に近松勘之助を評して

爰元で近松勘之助殿を合せて見ましやう、きりやうと申、こつがらといひ、天晴お若衆でござる、明そむるとりのとしの、聲ゆづり葉のあかねさす、春日のほのくと門々かざる近松の、今一入の色まさりて美しうなられし事、いかうと嗜に情が入故か、又

はまれく見る時によりての目ちがいか、先なんでも一段の御事、めでたくしこからぬ口のはにかけまくも、かたどりたる名は紋左衛門によせて、彌五の深窓に南枝始て花の姿見出したるより此方、諸藝あしわけ小船の、なぜにかいがまはらぬと氣の毒に思はるゝも、一きりやう有を以て、晶眞の目からいふなるべし……………

之に據ると前の一説の逆で、勘之助が門左の近松姓をかたどつた事になる。「彌五の深窓に南枝始て花の姿見出したる」とは福井彌五左衛門の門下から出たといふ意味であらう。門左を紋左としたのは言ふまでもなく當時の慣例から來た遠慮である。

近松の壽の門松の下巻道行の文に「そと八もんじの道中すがた、めつきでころす、しよていになづむ、けいせいこまめにたらいが女ばう、うけ出したらいのそこぬけて、かげもやどらぬ、きぬくの云々」とある。この「けいせいこまめにたらいが女ばう」の一句は何とも解しがたい。樋口氏の近松語彙には「傾城はよく腰湯を使へばかく云うたのであらう」とあるが、どうも納得しかねる。近頃わたや文庫の

おせん長右衛門	久寶寺町
いせさんくう	作本屋
新五人女	久兵衛

と題簽のある、踊くときやたゞきを集めた小冊子を見ると、こひのはりやいたゞきの唄に

二人たるやおせんをめにみてもなをらぬまをのみちやッテかのはりばうじよあらはれてマキたらいがにようぼうのみづかゞみ二人下  
うつるよくあかぼんのくぼわがでにわがのはみへぬは……

とあるので、ハタと手を打つた。近松の「傾城こまめに鹽が女房」は容色を賣物とする傾城は、こまめに鏡に向ひて身  
じまひをするが、町女房は家事のせはしなさに紛れて、なりふりかまふひまもなく洗濯鹽で水鏡を見るくらゐが關の  
山であるとの意味だと知つた。尤も「鹽が女房」といふ語は當時の通り言葉か流行唄の一句であつて、このたゞき節  
が創めたものではなからう。

さてこの「いせさんくう」と題する書は、おせんいせ參宮を初めとして、吉川多門、小櫻千之介、藤田吉三郎、櫻山  
林之介、玄大臣、上村辰彌、鈴木平七の追善の踊歌念佛、瀧川市彌死出の道行、心中あみだのはし女郎、心中花のい  
ろはうた、おもと  
源兵衛こひのはりあいたゞき、はりにつくいとゞぶし、お吉くう月たゞきごぼうの歌詞を収め、最後に  
役者を主題とした謎問答三十五ヶ條を添へた紙數十三丁の繪入半紙本である。刊記はないが寶永二三年比の板行と思  
はれる。追善の對象となつた俳優の歿年は不明のものが多いが、大抵元祿年中には物故したであらうと推測され、且  
書名に伊勢參宮を掲げ、初丁に參宮里程づけを附したる點などから考へて、寶永二年のお蔭參りを當込んだ出版と思  
はれるからである。

享保九年正月近松が最後の作關八州繫馬を上演する前年十一月に興行したお吉  
空月櫻町昔名花といふ竹田出雲の作は丸  
本がまだ發見されないのので、その内容を知る由がない。然るにこの歌謡集にそのたゞきが出てゐるので、その材料の

一斑を認めることができる。原文は假名がきで讀みづらいから適宜に漢字交りに書きかへた。

お吉くう月たゞきごぼろ

二人下光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨シテ下なまいだ南無阿彌陀佛の殊勝さにツキ打込み鉦も張上げし二人空月お吉の物語引イロギ  
くに涙の玉穗シテかけぞ頼む二世の縁ツキ空月或夜の睦言に二人御身とかうした事をさへ坊主の身にしと思ふにシテまだ氣の毒虫さし  
おこるツキいかに隔てた中じやとて二人せういん様はわがみにいかふ心ありさうに見ゆるは口口おふくろはおれをたゞツキつけてま  
はしやる風車下二人こりやとつさはかう此譯はおれは胸におぢぬはシテコトハ月様口口なべちやござらぬはツキコトバしてどうおもやる  
下二人さあわしをばつれて虎臥す野邊鯨浦へもつれゆきシテ竹簀子たかゆのこのうへでなとツキ世帯せうとはコトハおもはしやれぬか下二人そりや  
すいたとは云ひながらわれは元より坊主のシテすぎあいの道知らずツキゆくさきや的まを立てがみの二人ながふもならば薬なりとコトバ  
賣らふがシテどうしよツキかうしよ二人いやまさかいへゆきての煙草屋半べを頼んでいのツキいもとゝいふて啞ついで二人粹をこかし  
てはまらしてその後談合きわめんシテさあ〜今宵八つすぎにツキ抜けてでや〜シテあ二人おじや〜と手を引連れてたちいでシテと  
つばかは急ぐ道筋はツキ番屋にみゆる安堂寺町二人ぬけて行く身のきに口口おわれ坂をはや過ぎシテ戀につらいは松屋町口口くのと  
九之介橋二人わが親ながら恐ろしやによつとはへたるつのみやシテ鬼瓦焼く瓦屋のツキ煙は空に横町は二人道頓堀へ行く路の濱を通れ  
ば上町のシテそうか戻りのばら〜馬ノ夜明の鳥犬までも二人吠ゆるなが〜長町のふぢやを過ぎて今宮シテわれあきんどにもなる  
ならばツキ守らせ給へ惠比須でん二人千里一はねはかいきじや人が三丁とぶならシテ十丁もわれは飛田じやはツキ心はし〜かき〜  
〜〜と二人あすの難義はしらねども勇みに勇んでゆく空シテさてん〜天下茶屋ツキ口とぬけで〜橋樂よ二人西はこつまに  
なな在家こゝはおしやふの御墓じやシテイロ月は空月住吉のツキイロよしはお吉のきちの字じや二人月すみよしのかみながの引イロ岸の  
姫松諸共シテ守らせたまへと伏し拜みツキコトハおれがあたまとの橋とが似たシテコトバほんさまなせに下二人刺つてそこねたそり橋  
じやあ〜坊主落しめシテ月さまこなたは影がないツキわがみは猶いの見られぬは二人下けあ親に背いてでるからけどうでろくな

事はござるまいシテ其名ながする水茶屋のワキ店をつらりと見渡して二人よはねぬけれどちやうず橋安立町をはや過ぎシテ七どの墓にぞつかれける上イロ二人無常の煙たち去らぬ上イロ皆あの身なり下癩きすつる下南無あみだく上なままだあなむあくだあなまいだぶなまいみだ願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國と回向してこそ通りける。

右の文中にも「おれが頭とあの橋とが似た、ぼんさまなせに、そつてそこねたそり橋じゃ」といふ謎かけの軽口が見えるが、當時この遊戯が流行したと見えて、最後に載せた三十五ヶ條は謎ときの役者評判で、一々作者を署名してゐる處を見ると劇通の警句であつたらしい。

上るり本の紙と中川左門とが似た

不知作者

なぜにや 口がよいはさて

藤田吉三郎と旅で宿取つたと似た

正 成

なぜにや おちついたはさて

しびりと芝崎林左衛門とが似た

白 玉

なぜにや はて京へじやはさて

北野の不動と竹本義太夫とが似た

能 友

なぜにや はやりでたはさて

佐渡島傳八と牡丹餅とが似た

不知作者

なぜにや さもしいはさて

鈴木平左衛門と床で剃つた頭とが似た

扇 柳

なぜにや 氣味がよいはさて

不知作者とある分は大抵皮肉な惡罵に屬するものである。さてこの謎評によつて思ひ合せられることは近松の今宮の心中(寶永七年)の上巻序の文句で、橋づくしの役者評判だ。長文ながらあらゆる流行を採入れて行くとして可ならざるなき近松の手腕を示すために掲載する。

橋のいよこの、橋の上にて賣る聲は、煙管團扇煙草入、役者評判扇賣、難波藝者の風俗を、橋々名所になぞらへてかき集めたる藻鹽草、伊勢おのあまにあらねども其濱狩野八重桐を、龜井橋じやおしやる、心はの、さきはお旅の神かけて、跡先に又つゞく者がないはさて、袖島源治は新靱じやおしやる、それなせに、鹽物町のしたゝるたる、しかも藝に骨があるといの、桂木常世はゑのこ島とよなせゞ、ゑのころころゞゞき、よせて手飼に愛らしや、扱又嵐三十郎、鯉座橋とおしやる、心はの、何の料理につかふても仕出しがうまいは扱、櫻山庄左衛門福島じやおしやる、心はの、小がらなれども張りつめて舞臺一ばいかさも有、藝に身もある口中のしよりゞゞしたる雀鯛、それで菱穂のどこやらがひりゞとするとぞ答へける、音羽二郎三を雜喉場とは、鱒があるとの譬かや、上村吉彌は伏見堀じやおしやる、義理はの、舟板町の舟板の末には沖に乗出し、帆を十分のしるしとて今から人やこがるゝといふこと、扱市村玉柏は梅田橋と見立てたり、それなせに、はて渡れば色町越ゆれば火屋、ぬれにもうれひにもよふうつるは扱、杉山平八を四橋とはこれどうじや、江戸からも京からも四方へ引きつりひつばつた、踏んばたかつて山村がくはつとひろげた兩足は、百間堀を思ひ出す、善惡二つを噛みわけて、六義を正す柴崎に、思案橋を思ひ出す、篠塚二郎左を見る時は、大佛島を思ひ出す、三代つゞく奴風、嵐がふりを譬ふれば、其江戸堀を思ひ出す、嘉十郎が顔つきに炭屋橋を思ひ出す、かたきは三原重太夫、序にて作りし惡心の、切りでむくひの、くる時は、猪喰屋橋を思ひ出す

私が朝日新聞社の依頼をうけて近松全集十二巻を編纂し、その刊行を了へたのは昭和三年十月であつた。當初は曲

目索引や頭註の語句索引を附録として別に一冊刊行する豫定であつたが、種々の事情から遂に出さずじまひになつた。然るに實際この書を使用する場合に、何が何巻目にあるか、一冊に十曲乃至十七曲を収めたものだから、編者自身でも検出にまごつくことが多いので、自家用として外題索引を作つた。近松全集の豫約購求者は數千名に上つたのだから、この索引を私一人で利用するより、公刊して全集所蔵の方々の檢索の勞を幾分でも省くことができたなら、本懐至極だと思つて、本誌に掲載してもらふことにした。

語句索引の方も熱心な助力者によつて原稿はほど出來てゐるが、これはまだ刊行の見込がつかぬ。